

岩手県山田町における明治三陸津波以前の歴史地形復元

蝦名裕一*(東北大学災害科学国際研究所)・行谷佑一(産業技術総合研究所)・今井健太郎(海洋研究開発機構)

§ 1. はじめに

本報告では、1896年(明治29年)に発生した明治三陸地震津波の被災地となった岩手県山田町域について、明治期に作成された絵図史料などから津波発生前後の地形を復元する。また、この歴史地形情報に、明治三陸津波に関する諸史料の情報を重ね合わせることで、当時の被害を詳細に分析することを目指す。

§ 2. 山田町船越地区を描いた絵図史料

ここでは、旧下閉伊郡船越村、現在の山田町船越地区を重点的に述べる。船越村は、船越湾における漁業と海産物の交易で栄え、江戸時代末期の船越本村は住民627人、103戸であり、枝郷として田の浜・小屋島・大浦が存在していた。

津波以前の船越村を描いた絵図として、1874年(明治7年)に作成された『陸中国閉伊郡第拾七区内船越村絵図面』(岩手県図書館所蔵)があり、現在の船越半島全体が描かれている。これをみると、当時の船越村は船越湾に面した低地が村の中心地となっており、大半の家屋が船越浜に集中して建てられていた。明治三陸津波後に集落の高台移転が推進されたため、現在の船越地区の中心地は高台へと移っている。

次に、山田町域における明治三陸津波被害を詳細に記した記録として、当時山田町警察分署に巡査部長として勤務していた浅利和三郎が著した『山田警察分署所轄海嘯被害明細図』がある。浅利によると、船越村は人口622人、戸数123戸が存在したが、津波によって108戸が流失、全壊1戸、浸水が3戸、208人が溺死する被害をうけた。また、この海嘯被害明細図には山田町・折笠村・船越村・大沢村の被害状況について、それぞれの地域の地形、家屋や建造物の位置から、津波で流出、全壊・半壊、浸水などの被害の様相が1軒ごとに記録されている。これをみると、船越村の中心部では沿岸部に堤防が築かれているものの、津波に対しては無防備な状態で低地に存在していたことがわかる。



図1:『陸中国閉伊郡第拾七区内船越村絵図面』船越村部分

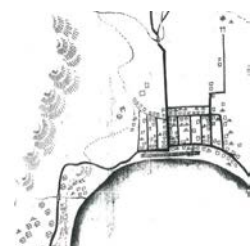


図2:『海嘯被害明細図』第二号図舟越村字舟越

§ 3. 船越地区の歴史地形の復元

現在の国土地理院50000分の1地図をベースとして、先述の史料に記された情報に基づき、明治三陸津波の歴史地形を復元したのが図3である。現在、明治三陸津波時の船越村集落の痕跡はほぼ消滅しているが、『陸中国閉伊郡第拾七区内船越村絵図面』に描かれている当時の船越村の街道・脇道の様子を、海蔵寺などの社寺の位置関係から判断して復元した。これに、『山田警察分署所轄海嘯被害明細図』に記載される当時の建物の分布や、詳細な建物の位置も考慮した。また、山奈宗真『岩手県沿岸大海嘯取調書』『大海嘯各村別見取絵図』に記載される明治三陸津波の情報を書き加えた。



図3:明治三陸津波前後の船越村の歴史地形

これをみると、被害の大半は船越浜に集中しており、高台の神社および海蔵寺を残してほぼ全ての家屋が流失している。一方、南西に位置する山の内地区では、17戸のうち流失4軒、浸水3軒の被害に止まっている。

§ 4. まとめ

明治三陸津波前後の歴史地形の復元から、船越村では、江戸時代を通じて天然の良港を中心として発展した経緯から、集落が海岸の低地に形成されたことが読み取れる。当時のこうした条件が、船越村における明治三陸津波による被害の拡大の一因であるといえる。

謝辞 本研究は東京大学地震研究所2019年度共同利用地震火山災害軽減研究の成果の一部である。ここに記して謝意を表す。